思ひ出の記

小出 美代子

焼夷弾が前方を真赤にして炸裂する。後で時限爆弾が轟音と共に爆発する。

そんな中を、私達はそれらを除けながら原っぱを探して逃げた。立ち止まって見た空に花火のように交互に落ちてくる焼夷弾を無感動のまま、美しいなと思って眺めた。

昭和二十年五月二十五日から二十六日未明にかけての空襲で、東京山の手方面は焼野原となったのです。

新宿から中野・杉並方面は見渡す限りの焼野原でした。

これが昨日までの東京かと思うほどの瓦礫の山に、煙りと硝煙の匂いがあちこちに立ち登っていました。

私は中野区の宝仙寺前あたりに実家がありましたが、家族全員が助かった事は何よりの幸せでした。

これからどうして生きていくか皆一生懸命でした。

空襲の中で亡くなった友達は数知れず、止むなく遠い田舎へ去って行った近隣の人達。

そんな中で人々は、焼跡のトタン板や木材の焼け残りなどでバラックを建て始めました。

昭和二十年八月十五日の玉音放送に依って敗戦を知りました。

日本が戦いに負けたと言う口惜し涙と、明日からは空襲がなくなるという心の安らぎを覚えたものです。

そんな時代の試練の中で、戦中戦後共、食糧難というに言えない苦しさをいやという程味わってきました。

米の配給もなく、芋などは上等な方で近県へ買い出しに行ったものです。

雑炊に入れる野菜もなく、日本の国のほとんどの人達は空腹に耐えていました。

もう あれから七十有余年の月日が立ち、今豊かな食生活の中にあって国の為に戦い亡くなっていった方々や、敗戦となって食べるものもなく栄養失調で亡くなって行った大勢の人達に、いのりと感謝を捧げつつ日々を生きていっております。